

この町とともに

洞爺湖町の歴史は、町の人々の歴史。様々な分野で町を活気づけてくれている人たちに、これからのまちづくりについて語ってもらいました。

TOYAKO縄文ガイドの会副会長

さとう せつお
佐藤 節夫さん

ヒゲの風貌と豊富な縄文の知識から、ガイドを受けた人に「学者さんですか？」と言われることも…。「縄文とは無縁の人生でした。定年後にこの町に住み、5、6年前に散歩の途中で入江貝塚を見つけたのが縄文との出会い。こんな身近に遺跡があるのはすごい」と、すぐに「アプタ・フレナイの会」に入会し、「TOYAKO縄文ガイドの会」には設立時から参加しています。

「縄文時代の素晴らしさはいくつもありますが、貝塚館にある2体の人骨レプリカだけでも縄文人の優しさと命への強い思いが分かります」と魅力を語ります。

ボランティアガイドが生きがいで、「今後も続けて一人でも多くに縄文を発信したい」と話す一方、「地元の人にもっと来てほしいし、一緒に活動したいですね」と地域で世界遺産を守り育てる機運の醸成に期待しています。

町の人にこそ知ってほしい
縄文の魅力

■プロフィール 1942年（昭和17年）4月生。樺太出身。民間勤務を経て札幌で定年退職。入江地区で10数年間鉢花栽培。令和5年3月～縄文ガイドの会副会長。

Re:TOYAプロジェクト

しおのや えみ
塩野谷 絵美さん

洞爺湖周辺の60以上の店を巻き込んだ「ザ・マップ・マイフットプリント・アラウンド・レイクトーヤ」を作ったのは、コロナ禍で観光が大打撃を受けた2021年。「近隣から洞爺湖に来てもらえないか考えました。地元近郊の人が自分なりの洞爺湖の楽しみ方をつくれば、一過性ではない活性化につながるのではないかと」と振り返ります。

ザ・マップは、加盟店にある計60個のスタンプを自由に集め、オリジナルマップを作成。なじみの店ができたユーザーも多く「コロナ禍だからこそ、訪れる人と迎える人の相互交流を楽しんでもらいたかったです」と話します。ザ・マップは、SNSなどで広がり、2025年4月には達成者が100人に到達。「未来を見据えてビジョンを持ち、この土地の本来の魅力を再認識してもらえたら」と、様々な角度から町のことを伝える方法を考えています。

自分でつくる

洞爺湖の楽しみ方

■プロフィール 1979年（昭和54年）11月生。洞爺湖町出身。大学卒業後、民間勤務を経て平成21年、洞爺湖温泉でホリデーマーケットトーヤを開業。

この町とともに



村が残した文化の足跡を未来へ

■プロフィール 1981年（昭和56年）2月生。札幌出身。2015年、洞爺湖町に移住し、洞爺湖で雑貨店を経営する傍ら、令和2年ごろから洞爺湖芸術館友の会で活動。

洞爺湖芸術館友の会副会長

あらい ともこ
新井 知子さん

「小さくても文化を、ここでしかできないことをやっていきたいです」。住んでいた札幌から通いながら段々と魅了されていた洞爺地区。同じ移住者の心の支えになっていると感じたのが芸術館でした。何度も訪れるきっかけになったのは、館内に収蔵されている砂澤ビッキの作品との出会い。そして、ビエンナーレなど洞爺村の芸術への取組でした。

「今だと実現できないことをやっていたのが興味深いです。ビエンナーレのテーマとなっている『手のひらの宇宙』は、いくつもの願いや人間の可能性をはらんでいると思います。人の手や暮らしや芸術・平和をもたらすために使われたらと願うばかりです。当時の村長の言葉にもとても惹かれます。先人がやってきたことを調査して発信してみたいです」。村が残した確かな足跡を、町の文化に生かそうと考えています。

いぶり噴火湾漁協虻田地区青年部長

あかま しょういち
赤間 将一さん

今年2月、洞爺駅近くに100人以上の人だかりができました。お目当ては虻田の前浜で獲れたばかりのホタテの直売会。1キロ分のホタテが詰まった約300袋は開始から20分足らずで売り切れる人気ぶり。その後、洞爺地区、再び虻田地区と計3回開催し、いずれも完売。大成功に終わりました。

ホタテが名産なのに地元であまり流通していないことに、自ら海に出ながらも疑問が消えませんでした。今回の直売会は「顔が見えなかった消費者を知るきっかけになりました」と振り返ります。

地域振興や漁業のPRは青年部の仕事で、今回の直売会は青年部としては初の試み。地元からはさっそく「またやるんですか」との声が届いています。「地元に住んでこう言ってもらえるのはうれしかった。責任を持って育てていこうと思います」と意気込んでいます。

地元こそ届けたい
故郷の海の恵み



■プロフィール 1984年（昭和59年）10月生。洞爺湖町出身。2016年4月から漁師になり、ホタテ養殖などに携わる。令和6年、いぶり噴火湾漁協青年部長に就任。

この町とともに



みんなの口に届けたい
自慢の野菜

■プロフィール 2005年（平成17年）5月生。洞爺湖町出身。高校卒業後、滝川市の農業関連施設で研修を受け、令和6年10月から実家の農家で農業に専従。

町内の最年少農家

いさい いぶき
以西 生芽さん

実家が営む「いさいファーム」で、農家一筋で働くようになって一年。じゃがいもやビートなどの栽培に携わり、特に大根は「うちが一番おいしいです」と胸を張ります。

中学生の頃、収穫作業の手伝いや野菜の販売を喜んでもらったことをきっかけに、農業科がある高校に進学。実家の農業を継ぐことを決意しました。専従で働く中、手伝いだけでは分からなかった大変さを体感していますが「毎日野菜を見て生育の早さを実感できるのは楽しいです」と目を輝かせます。

現在はJ Aとうや湖青年部に仲間入りし、イベント販売などで地元野菜をアピールしたいと意気込んでいるところ。実家で取り組んできた農薬の削減も学んでいき「これからも美味しい洞爺の野菜を作るのでぜひ食べてほしいです」と話しています。

洞爺湖町自治会連合会会長

みやた としお
宮田 敏夫さん

町内41の単位自治会で組織する洞爺湖町自治会連合会。5月に新会長に選任され、地域コミュニティ活動の牽引役の重責を担っています。

農業を営みながら、町議会議員やとうや湖農協の組合長の経験から得た知見はその人柄に現れ、大勢が信頼を寄せています。「役員の協力を得ながら従来の事業を継承しますが、特に研修活動に力を入れます」と抱負を語ります。

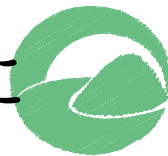
各自治会は「組織の小規模化」、「加入率の低下」、など厳しい状況にあります。「自治会活動に協力的な人とそうでない人がいます。考え方の違いは仕方ないけど、同じ地域に住むのも何かの縁…。お互いが助け合える町になるといいよね」と話します。また、災害時の助け合いについて「6月に海岸沿いの自治会が共同で防災学習会を実施したのはいいことだね」と自治会間のさらなる連携に期待しています。



住民自治の未来は町民の助け合いに

■プロフィール 1949年（昭和24年）3月生。町議会議員を平成15年から12年間。とうや湖農協組合長を平成28年から2年間。令和2年～青葉2区自治会長。令和7年5月～洞爺湖町自治会連合会会長。

この町とともに



町が誇る祭典を成功に導く

TOYAKOマンガ・アニメフェスタ

実行委員長 おかだ しんぺい 岡田 晋平さん

町を代表するイベントに育った「アニフェス」。「まさか自分になるとは思いませんでした」と実行委員長就任時の思い出を振り返ります。

当初はクロークの作業の手伝いでアニフェスに関わりました。コスプレヤーのこだわりが詰まった衣装を預かりながら舞台裏でイベントを支え、2代目の委員長に就任。打ち合わせや出演者との調整に追われ「頭のどこかに年中アニフェスがあり、プレッシャーも感じます」と苦労は絶えませんが、成功に全力を注ぎます。

アニフェスが長く続いている理由として「参加者とスタッフの熱意が高く、まちの人たちが受け入れてくれていることが大きいと思います」と周囲の支えを挙げます。関わってくれている人たちへの感謝を胸に、地元・洞爺湖温泉が誇る祭典を守っていくつもりです。

■プロフィール 1970年（昭和45年）7月生。洞爺湖町出身。洞爺湖温泉で岡田屋の経営に携わる傍ら、令和2年より実行委員長に就任。

洞爺湖有珠火山マイスター

かのまた 鹿俣 ともよさん

町に移り住む前は京都の旅行会社に勤務。オーバーツーリズムの影響に疲弊する人も少なくない中、喜ばれたのは工房の見学など体験型ツアーでした。「地元に関わり、人と絡む体験を手助けしたいと考えるようになりました」と語ります。

町に移住し、町を知る中で、洞爺湖に代表される豊かな自然の成り立ちと火山活動が切り離せないことを知りました。その後、外国語で外国人を旅行案内するための国家資格・通訳案内士に合格し、さらに洞爺湖有珠火山マイスターの資格も取得。「旅程にストーリーを組み込み、知的好奇心を満たせる一貫性のあるツアーを提案したいです」と意気込みます。恵みをもたらす一方、大きな爪痕も残した有珠山噴火。「表面的な案内だけではなく、噴火の仕組みも伝えられるようにしたいですね」とその深奥を学び続けています。

火山の恵みと脅威を伝えるために

■プロフィール 1988年（昭和63年）9月生。埼玉出身。旅行会社勤務を経て、2023年に通訳案内士に合格。翌24年に洞爺湖有珠火山マイスターの資格を得て活動中。

この町とともに



子育てママのため
夢にチャレンジ

■プロフィール 1983年(昭和58年)9月生。室蘭出身。令和2年、洞爺湖温泉でミトンピザを開業。クラウドファンディングでキッチンカーを導入し、子育て支援にも注力。

チャレンジショップ制度で開業

まつばら
松原 あきなさん

自らDIYで改装したキッチンカーを走らせ、香ばしい匂いが漂うピザを届けています。もともと飲食業には縁がなく、子育てに忙しい生活を送っていました。時に苦労も絶えない中、同じ子育てママの居場所をつくりたいと一念発起。「一緒に食べたり、分け与えたり、親子で食べやすいのがピザ」と考え、ピザ店の開業を決意しました。

営業を始めようとした時はコロナ禍の真っただ中。そこで町が実施するチャレンジショップ支援事業補助金を利用。「開業して1、2年目を勇気をもって過ごすことができました」と振り返ります。キッチンカーを使って小学生の職業体験にも協力。仕事で人に喜びを届ける経験を生み出しています。今後は、ピザ作りのワークショップや子どもたちの起業家教育など活動を広げながら「誰かの一步を応援できるように進化したいです」と夢を描きます。

洞爺湖アイヌ協会会長

ふじの みつひろ
藤野 満裕さん

静寂の中、囲炉裏に立つイナウ(木幣)に向かい、祭司の祈りの言葉がアイヌ語で語られます。7月にウトウラノで洞爺湖アイヌ協会主催の「チセノミ・カムイノミ・イチャルパ」儀式が執り行われました。

副祭司を務めた藤野会長は「この儀式が終わるとホッとするね。祭司ができたらいいいけど、普段はアイヌ語を使わないので祈りの長い言葉をなかなか覚えられないし、儀式の作法も結構難しいんだよね」と、少し悔しそうに話します。

洞爺湖町アイヌ民族共生拠点施設「ウトウラノ」が完成して5年。コーディネーターを中心にアイヌ模様の刺繍やお盆づくりの教室などを定期的を実施し、参加者に好評です。「会員減少、後継者不足の問題はあるけどアイヌにこだわらず、一般の人参加しやすい仕組みを考えて、地域全体でアイヌ文化を伝えていきたい」と目標を話してくれました。



地域と共にアイヌ文化の継承を目指して

■プロフィール 1960年(昭和35年)11月生。旧虻田町生まれ。高校卒業後病気の父親の跡を継いで漁業に従事。平成30年4月~洞爺湖アイヌ協会会長。